

審査の結果の要旨

氏名 宮原 真美子

異世代間シェア居住の可能性

ーアメリカの事例に見る持ち家住宅を活用した人間関係形成に関する考察ー

本論文は、アメリカ・カリフォルニア州でのオーナー宅活用・同居型シェア居住に着目し、その生活実態からシェアの多様性やシェアが可能とする生活像を示すことと、シェア生活の中で住宅を中心に形成されるアドホックな人間関係形成要因を人間関係と間取りから抽出し、増加すると見られる若者単身者、および高齢単身者の居住環境のあり方を、考察・提案することを試みるものである。

研究の背景として、日本の高齢化、少子化、離婚率の増加などの影響により世帯は縮小し若者の単身世帯及び単身高齢者世帯が著しく増加しているのに対し、これからも増加すると推測される単身者や、世代間共生での視点での住宅供給の試みは少ないこと、また、これまでの単身者の居住環境は、プライバシーに対して敏感になり独立性や孤立性を求める流れであった点を問題意識としている。

本論文は、全6章で構成される。

第1章では、研究の背景、目的、位置づけ、論文の構成を示した。本論文で扱うオーナー宅活用型シェア居住は、仲介団体がオーナーと入居者をマッチングするホームシェアと、ADUを活用しオーナーが自主的に入居者を選定しシェアをするADU活用型シェア居住とした。

第2章では、調査対象をまとめ、調査地アメリカでのシェア居住の動向をその社会的背景とともに記述した。

第3章では、ホームシェアの特性を把握するために、日本でも近年若年単身者の一居住スタイルとなりつつある同世代で行なわれるルームシェアと比較しながら、アンケート調査の結果を元に、その生活・居住環境の実態と交流の実態を明らかにした。ホームシェアでは居住者間での主な交流が挨拶と会話が中心であり行為の共有は少なく、居室面積や設備数の充実により居住者間による空間の使い分けが行なわれ、個人空間の独立性を維持しながらも一つ屋根の下で暮らす中で何らかの安心や安全を感じていることを明らかにした。ホームシェアにおいては一つ屋根を共有した結果、個々人が物理的には独立性を維持しながらも、それを超えて居住者間でお互いの気配や、安心・安全を感じる認識の範囲（アドホックな人間関係）が存在していることを把握し、その根本に家族が住んだ住宅でホームシェアが行なわれていることに関わりがあるのではないかと推察した。

第4章では、ヒアリング調査結果を元に、シェア居住開始後の生活の仕方やアドホックな人間関係形成に影響を与えると考えられる要因として、動機、ルール、家賃、居住者層の4つの視点から分析した。居住者層については、社会人事例(同世代/異世代)、介護を必要としない高齢者事例、介護・手伝いを必要とする高齢者や障害者事例、子育て世代を含む事例と、若者に限らず、そのシェア生活に多様性があることを示し、各居住者層のシェア居住の特徴を家賃の流れとシェアから得るものから把握した。

また、居住者がある一定の距離を維持しながらも日常での些細な出来事を話す楽しみやいざという時の安心感を得ることこそが生活環境に必要とされることであり、それが失われた孤立した居住環境に問題があると考え、シェア生活の中での“偶発的な関わり合いの場面”に着目し分析した。偶発的な関わりに対して自分が思うように関わられるか否か、すなわち関わり方への選択の有無が、シェア生活の居心地やプライバシーとコミュニケーションとの均衡に大きく影響を与えることを把握した。関わり方への選択の余地は、共有空間を占有している人の有無、住宅内/外のどこをシェアしているかが関係していることを示した。また、居住者間の物理的な距離のみではなく、共有空間に居住者がいるか/いないか音や気配を感じられる距離や、他の居住者が何をしているのか見える距離など日常的にちょっとした会話をすることでお互いの生活ルーティンを知っているから計れる距離であり、それは一つ屋根の下を共有しているから可能なことであると考察した。

第5章では、アドホックな人間関係形成の成立要件を、間取りから考察した。調査を行なった住宅の間取りをシェアの状況と間取りの独立性からⅠ～Ⅴの5つに分類した。

まず、LDKなど生活空間をシェアする間取りⅠ・Ⅱ・Ⅲにおいて、共有空間、プライベート空間、共有空間とプライベート空間を繋ぐプライベート・パスの有無、重複する機能が生む曖昧な空間の役割について記述し、それらの空間が住宅内での人の居方(居場所選択)にどのような影響を与えるかを明らかにした。

次に、敷地やガレージ、ランドリースペースなど非生活空間をシェアする間取りⅣ・Ⅴについては、ADUの玄関へのアプローチ路の位置には、オーナーの意向に委ねられるもの、オーナーの生活空間側、オーナーの非生活空間側、角地などで別方向に設けられるかの4つのパターンがあり、動線がどこにあるかにより居住者間の交流が異なることを明らかにした。

第6章では以上の結果から、居住者が主体的に関わることで生み出される多様なシェア居住のかたちと、アドホックな人間関係形成の要件をまとめ、これから増加すると見られる若者単身者、および高齢単身者の居住環境のあり方について提言を述べた。

以上のように本論文は異世代間シェア居住に着目し、そこでのアドホックな人間関係形成の要因を示すことで、今後の単身者居住の可能性を示した。

今までのシェア居住に関する研究は若者を対象としたものが主であり、異世代を対象とした研究は未開拓の領域であった。また、コミュニティ形成に関する研究について、これまで定住意識の高い層を中心としたものが主であったが、本論文では定住意識の薄い単身者層を対象とし、そこでの人間関係形成の要件を示し、今後の単身者居住のあり方の方向性を示唆する研究として、建築計画学の発展に大いなる寄与となりうるものである。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。